

平成 26 年 9 月 28 日

# 南の風 80

南部ミニバスケットボール連盟  
会 長 藤原 敬一

80号。節目です。日頃感じていることを書きます。

「ほめて伸ばす。」とよく言われます。ほめることは大事です。皆さんもご存じの下記のような名言もあります。

『やってみせ、言って聞かせてさせてみて、ほめてやらねば人は動かじ』

～ 太平洋戦争時 連合艦隊司令長官 山本 五十六語録より ～

バスケットボールの指導に当てはめてみます。1つのスキルを教える時に、コーチがまずやってみせる（示範）。言って聞かせる（説明）。させてみせる（模倣）。褒める（賞賛）。このプロセスが大事だと山本五十六は言っています。

私の考えを書きます。「褒める」と「叱る」、この2つは対極にある言葉のように捉えられますが、私は、実はどちらも、子ども（選手）を伸ばすあるいは、成長を促すための言葉（方法）だと思っています。バスケットボールで言えば、経験の浅い選手や、小学校低学年の選手には「褒める」ことでやる気を喚起することが大事です。頑張ったことや、続けて挑戦したことなどについて、少し大げさに褒めます。そのことが、次への活力になると考えるからです。

逆に経験のある選手には、「褒める」ことよりも、やったことに対して、あるいはチームの中での存在感に対して、「認める」ように指導しています。こちらの要求度をやや高くして、具体的に「褒める」ことを「認める」という言葉に置き換えています。年齢が上がるにしたがって、ただ褒めるのではなく、行為や行動を具体的に「認める」ことによって、本人が「存在感」を確認できるようにすることが大切だと考えるからです。

ただ私は、根底には「褒められてばかりいるうちは半人前」だと思っています。「叱る」ことの大事な点は、子ども（選手）の反骨心を煽ることです。「なにくそ負けないぞ」という気持ちを持たせることです。もちろん「叱り方」があります。例えば、私が叱る時は失敗したからではありません。練習したことをゲームで「やろうとしなかった時です。」「なぜ挑戦しないのか、やってみろ」です。また、「同じミスを何度も重ねた時です」。選手が、自分で乗り越えるように仕向けます。叱咤激励です。失敗を叱ってしまっては、選手は尻込みします。次に「また失敗するのでは」と考えるからです。もう一度書きます。私は、「褒める」「叱る」を私は同義語と捉えています。どちらも成長を促すものだからです。

最後に、山本 五十六の次のような名言も紹介しておきます。

『話し合い、耳を傾け承認し、任せてやらねば人は育たず』

『やっている、姿を感謝で見守って、信頼せねば人は実らず』

この2つは、コーチの育成やチーム、組織作りにも通じるものです。我々ミニバスケットボールに携わる者として、指針にもなるものと思います。心に留め置きたいものです。

今回は普段考えていることを紹介してみました。